慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ブルデュー文化社会学における量的調査の影響 : 1960年代の初期文化研究を中心に
Sub Title	Influence of quantitative researches on Bourdieu's sociology: Bourdieu's practice and theory of cultural sociology in the 1960s
Author	三浦, 直子(Miura, Naoko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2011
Jtitle	哲學 No.125 (2011. 3) ,p.235- 262
JaLC DOI	
Abstract	It is important that the experience of quantitative researches influenced Bourdieu's sociology. In this paper, I examine Bourdieu's practice and theory of cultural sociology in the 1960s and find out two phases of the influence of quantitative researches. First, he located the statistical data (results of quantitative analyses) as the methods of controlling his practice in researches, so as to reflect it in epistemology. Therefore, by introducing the statistical approach, he aimed at objective research practice, excluding researcher's spontaneous conviction and common sense. Secondarily, by introducing it, he constructed original concepts and formed his unique sociological theory. Especially, his concept of "habitus" enabled to mediate subjective experiences and objective regularities, by involving the dualism of the statistical probability (the gap between the subjective probability and the objective probability).
Notes	特集 : 人間科学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000125-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

ブルデュー文化社会学における量的調査の影響

――1960年代の初期文化研究を中心に――

三　浦　直　子*

Influence of quantitative researches on Bourdieu's sociology —Bourdieu's practice and theory of cultural sociology in the 1960s—

Naoko Miura

It is important that the experience of quantitative researches influenced Bourdieu's sociology. In this paper, I examine Bourdieu's practice and theory of cultural sociology in the 1960s and find out two phases of the influence of quantitative researches. First, he located the statistical data (results of quantitative analyses) as the methods of controlling his practice in researches, so as to reflect it in epistemology. Therefore, by introducing the statistical approach, he aimed at objective research practice, excluding researcher's spontaneous conviction and common sense. Secondarily, by introducing it, he constructed original concepts and formed his unique sociological theory. Especially, his concept of "habitus" enabled to mediate subjective experiences and objective regularities, by involving the dualism of the statistical probability (the gap between the subjective probability and the objective probability).

* 神奈川工科大学基礎・教養教育センター准教授

1. 問題の設定

フランスの社会学者ピエール・ブルデュー（1930〜2002 年）の研究業績は多岐にわたるが，それは自らの社会学的研究の過程において「見せかけ」の二項対立図式を止揚し全的研究を志向するという，彼の研究姿勢に由来している．棲み分けと立場表明を求めるアカデミズムにおいて，ブルデューが超克を目指した認識論上の二項対立図式とは，所属する学問領域は社会学か民族学かを問い質す二者択一であり，その研究方法は理論研究か経験的研究かを迫る二者択一であり，前者であれば理論的アプローチにおける主観主義と客観主義との対立，また後者であれば調査方法における質的調査と量的調査との対立であった．研究実践のあらゆる過程に介入するこれら「見せかけ」の二項対立の境界線を越えて，全体性を回復しようとする意欲を抱き続けたブルデューは，1960 年代の初期文化研究において自らの研究姿勢を「全的人間学 (anthropologie totale)」と称している．また同時に，このような研究姿勢は，ブルデュー社会学の研究対象の設定にも大きな影響を与えたといえる．すなわち，自らを取り巻くアカデミズムに蔓延する二項対立に対峙しようとする研究姿勢が，翻って人々の日常実践に対して境界線を引き序列化を行う象徴的権力（とりわけ学校教育や文化と階級）の社会学的分析へと，ブルデューの関心を強く向けさせていったといえよう．

しかし，既存のブルデュー研究では，ブルデューの社会学理論に登場する特定概念の理論的解釈に終始しがちで，それゆえ，フィールドにおける実際の調査経験がブルデューの理論形成に与えた影響が十分に汲み取られているとはいい難い．その原因は，ブルデューが記した実証的分析や統計的図表，方法の指示，標本抽出法，数理モデル等を，十分に考察し読まれることが少ない，すなわち「飛ばして読んで」しまいがちだったからではないだろうか．ブルデュー自身が警戒を促していたように，社会学の研究

成果を「それらが産出される手続きとは関わりなく読み取ってしまうこと」は，「別の本を読むに等しい」[1]［Bourdieu 1980 b＝1990: 39–40＝50–51］.

本論文は，ブルデューの学説形成史の研究において，これまで軽視されてきた感のある量的研究・統計的手法の重要性について提起し，その位置づけを確認することを企図している．そこで，「全的人間学」を自称したブルデューの初期文化研究を対象として，既存の理論研究ではあまり注目されることのない，ブルデューの研究実践における量的調査の導入と，理論形成への影響について検討し考察する．本論文では，特に『写真論』（1965 年：原題『中間芸術』※以下，本論文での表記は『写真論』で統一する）と『美術愛好』（1966 年）を中心に論じる．この 2 冊は，初期ブルデュー社会学の研究手法の詳細を開示した著書であり，後の研究実践の萌芽が数多く見て取れるが，これまであまり取り上げられなかったものである．また，2 冊の著書の調査時期が連続しているため，ブルデューの研究実践の展開と深まりを考察するに適した対象といえる．

なお，本論文では，その性質上，ブルデュー社会学における「量的調査」の影響を対象としているため，「質的調査」の詳細と影響については別の機会に改めて論じたい．加えて，本論文では初期文化研究に限定して論じているため，同時期に実施された「教育社会学」に関する量的調査については言及していないことを承知されたい．

2.　ブルデューと量的調査との出会い（アルジェリア社会の共同研究）

ブルデューは，エコール・ノルマル（高等師範学校）で哲学を専攻し，卒業翌年の 1954 年からアルジェリアでの 2 年間の兵役の後，アルジェ大学の助手となって現地のフィールド調査に着手した．この時期ブルデューは，まだ哲学者を自認していたという［Bourdieu 1987＝1991: 16＝

15]．しかし彼の哲学的な動機，すなわち哲学が説明をせずにきた，命題の本質的な原因を現実社会の中に探求しようという意図が，逆説的に彼を社会科学の研究へと向かわせたことは注目に値する[2]．換言すれば，ブルデューはその研究の端緒から，哲学的命題をフィールド調査で検証し修正する過程に，また理論研究と実証研究の不断の往復活動に，自身の研究の立脚点を見出していたということである．それはまた，社会科学の研究過程そのものに対する認識論や方法論の検討とも不可分であることが指摘できる．

こうしてブルデューは，急激な資本主義経済の浸透と社会変動に翻弄されるアルジェリアの人々の「感情生活の現象学」について研究すべく，参与観察や人々への聞き取り調査（インタビュー），家系図の作成，家屋や生活用品の写真撮影といった「質的調査」を，独自に習得し実施した．これら民族誌（エスノグラフィー）は，後の主著『ディスタンクシオン』にも見られるように，ブルデューが好んで用いた研究手法のひとつである．

しかし，同時にブルデューは，INSEE（フランスの国立統計経済研究所）のアルジェリア支局に当時在籍していたアラン・ダルベル，ジャン＝ポール・リヴェ，クロード・セイベルら，後の「フランスデータ分析」学派に属する統計家たちと共同で，アルジェリア全国を対象とした二段層化抽出法による「量的調査」を実施し，家族を単位とする労働時間や家計に関する大規模な統計分析を行った．これはブルデューにとって，フィールドでの必要性から生じた実地訓練 (OJT) としての統計的手法の習得であった．その際，サンプル抽出や数理モデルの厳密な構成を学ぶと共に，先例主義的・実証主義的伝統によって統計学者たちが自問せずにきた量的調査の基本的操作について，例えば，データを集める当の対象を体系的理論からどのように構成するか，またコーディングの技法がどのような帰結を生み出すのか，そして，ある問題設定から体系的な質問をどのように尋ねるべきか等について，改めて省みる機会を得たとブルデューは当時を回

想している［Bourdieu 1988＝1991: 248＝466］．統計的手法自体が内包する問題を研究過程で絶えず問い直す反省的な研究実践は，後に展開されるブルデュー社会学の大きな特徴である．ブルデューは自らの社会学の研究成果を，理論的な構築物そのものではなく，理論構築へと至る手法（反省的な研究実践）であると強調しており[3]，「modus operandi（研究の手口，やり方，産出原理）」というラテン語を用いて言及している．こうした反省的な研究実践が早くも，この時期のアルジェリアの量的調査において「Le mode operatoire（作動中の方法）」と仏語で表現され，表記法や層化，層と地域の間のアンケート調査の割り当て，理論上の確率，ある家族の出現に関する実際の確率，サンプルの訂正などについて検討を重ねていたことは［Bourdieu et al. 1963, 228］，驚きに値する．アルジェリアにおける量的調査との出会いと経験が，ブルデュー社会学の基層的形成に多大な影響を与えたことは，疑いないものといえるだろう．

1958 年から 1961 年にかけて行われた，変動期のアルジェリア社会の質的・量的調査を通じてブルデューは，先進国の研究者が自明視してきた近代的な計算と予測の性向を産出する経済的・社会的諸条件を分析し，地域や階級ごとに異なる人々の経済的性向と新たに外部から強制された経済的世界との断絶が社会的混乱を生じさせていることを明らかにした．これら共同研究の成果は，統計学者 3 人による第 1 部「統計データ」と，ブルデューによる第 2 部「社会学的研究」からなる，550 頁を越える大著『アルジェリアの労働と労働者』（1963 年）として刊行された．

3.　初期文化研究における量的調査の導入（フランスにおける写真実践の研究）

1960 年にフランスへ戻るとブルデューは，翌 1961 年から 64 年にかけて，ヨーロッパ社会学センターのレイモン・アロン[4]や，帰国後に教鞭をとったパリ大学やリール大学の学生や同僚の研究者たちと共に，「写真」

に関する質的・量的な調査を実施して，フランス国内における文化的実践の階級格差を描き出した．この調査を通じてブルデューは，誰もが実践できて身近である（家族行事や観光旅行などの「記念写真」としてありふれている）ために芸術として評価されにくい「写真の実践（撮影や鑑賞）」を，文化的実践のひとつと位置づけて研究対象に設定した．これは，当時のフランス社会学における理論主義と実証主義の対立，あるいは後の主観主義と客観主義の対立において，いずれの立場からも共に距離を置く試みであった．ブルデューは，社会的に軽視され，研究対象として無意味とされてきた「写真の実践」を観察と測定によって経験的に把握し，人々の文化的実践を産出する社会的諸条件を理論的に考察するための立脚点とすることで，理論研究と実証研究の超克を試みたのである．

その際に使用された調査資料には，当時ブルデューがヨーロッパ社会学センターで教えていた社会調査の実習データ等が用いられている．ブルデュー自身が直接関与した調査に限定してまとめると，1961〜1962 年度には自ら「農村部における写真についての調査」を行い，1962〜1963 年度にはリールとパリで「写真に関する意見および態度」について予備調査を指揮した．翌 1963〜1964 年度には，「写真実践と写真に関する態度」について，パリ（276 名）とリール（262 名）および地方の小都市（154 名）における合計 692 名の回答者を対象にアンケート調査を実施し，その監督・指導にあたった．その後，J. C. シャンボルドンの協力を得て，写真に関する 6 つの既存研究（二次資料）[5] と比較しつつ，調査結果に詳細な分析を加えた［Bourdieu et al. 1965＝1990: 333–8＝331–7］．

4. 量的調査に基づく理論化の過程（『写真論』の研究実践）

こうして執筆された『写真論』（1965 年）の巻末付録には，人々の写真実践（写真撮影の実施または拒否）に関して，ブルデューが調査データに対する統計分析（多変量解析）の結果を踏まえて考察した「理論モデ

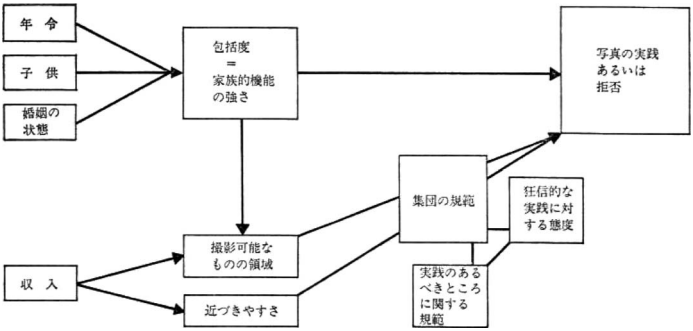

図.『写真論』における理論モデル[6]

ル」の図が掲載されている．説明文中では，要因間を結ぶ個々の「矢印」が行パーセントのクロス表の読解に基づいた因果関係を示していることが，時に明示的に，時に示唆的に言及されている．さらに説明文をたどると，このような統計分析の結果を踏まえてブルデューは，要因間の因果関係に関する新しい仮説を立て，そこから「関係間の関係」である体系的な仮説を導出し，実際の写真実践を産出する社会的諸条件を理論的に考察したことが明らかとなる．そこで，以下に調査結果の分析を説明文に沿って図を読み解くことで，ブルデューの理論構築の過程を抽出する．

最初にブルデューは，既存研究では人々の写真撮影を「収入」からの影響と直接結びつけて結論づけていたことに注目した．しかし，収入の上昇は確かに写真撮影の機会増大に結びつくものの，他方で，カメラ等の機材や写真の画質へのこだわりをも増大させ，写真撮影に費やす経済的な要求水準を上昇させることで，結果として写真撮影の機会を「減少」[7] させる要因としても作用することが，データから導出された．ここからブルデューは，「収入」を単純な「増加関数」として見ることに対して，「真の問題，すなわち写真活動を棄権している人々の問題を無視していることになる」［Bourdieu et al. 1965＝1990: 339＝338］と反論する．一定以上の収入を得ている人々のなかでも「写真は高くつくから」と写真実践に否

定的な層が存在するためである．そして，一見「収入」の影響と見える変化が，「階級のエートス」および「人々が写真に認める値打」という要因によって説明されることをデータから立証する．例えば，写真を撮影するだけでなく，自ら現像もするという写真実践に関しては，「収入」では均質化されてしまう格差が，階級カテゴリーを導入することで労働者や中間管理職に最高値が見られることから，「社会階級」が要因として大きく影響することを指摘している．

次に，ブルデューが注目したのは，人々の「年齢」「子供の有無」「婚姻状態（既婚，独身，死別・離婚）」が，家族への「包括度」の「関数」として作用することである．例えば，「子供の有無」は，カメラの所有や写真撮影に大きな影響を与える．ブルデューはこれを，一見すると愛おしさ等の「子供が引き起こす感情」に由来すると解釈されがちだが，「それよりも，家族集団の統合力の大きさによって決定されることの方がずっと多い」［Ibid. 343＝342］ことを，データを用いて実証する[8]．その上で，上記３つの変数は間接的な影響を及ぼすに過ぎず，家族への「包括度」が最終的な「写真撮影の実施や拒絶」という写真実践の要因であると分析している．さらにブルデューは，理論モデルの図において，家族への「包括度」を，写真撮影の「家族的機能の強さ」と同値（あるいは対価）であると定義する（「＝」記号で結んでいる）．同値とは，直観的な類似という意味ではなく，集合論的に構成要素や表現形式が同じであり，それゆえ統計上も置き換え可能な変数と見なすという意味である．これにより，例えば，家族への統合の度合いである「包括度」がもっとも低い未婚者（独身）においては，カメラを所有したことがなく写真撮影を面倒がる層と，（家族写真ではなく芸術作品としての写真撮影に憧れて）名人芸的写真実践を渇望する意欲的な層という，両極の形態に分断されているデータ結果は，いずれも写真撮影の「家族的機能」の弱さ・低さに由来する，同根の異なる表出であると分析される．同様に，家族への「包括度」の要因とし

て，また「ヴァカンス中の家族写真に与えられる比重の変化」［Ibid. 348＝346］を説明する測定可能な指標として，夏のヴァカンスに（日本で言えば，盆と正月の帰省時に）親類の家へ集まり家族と一緒に過ごすかどうか，その際に写真撮影を行うかどうかという問い，すなわち写真撮影の「家族的機能の強さ」が用いられる．さらにここから，撮影対象として人物/行事/風景/静物を選ぶかどうかという「撮影可能なものの領域」が，ヴァカンスの過ごし方（旅行時の風景写真や記念撮影，親類宅を訪問した際の集合写真など）を通じて「包括度＝家族的機能の強さ」の関数として，またヴァカンスの過ごし方に直接影響する「収入」の関数（「ヴァカンスに出かける割合」の「単純な関数」であり，「ヴァカンスを家族で過ごす割合」の減少関数［Ibid. 348＝346］）として分析されるのである．

最後に，既存研究で指摘された「収入」を改めて詳細に分析したブルデューは，「撮影可能なものの領域」および写真撮影への「近づきやすさ」が「収入」の関数として算出できるものの，それらが「写真撮影の実施または拒否」という写真実践を規定するには，「集団の規範」すなわち階級のエートスを「媒介」しなければならないと考察したことは，注目に値する．ここで，「媒介」という直接的な因果関係とは異なる概念をブルデューが導入していたことは，矢印ではなく直線で結ばれた理論モデルの図からも推察できる．この階級のエートスは，「実践のあるべきところに関する規範」として，例えば家族の集合写真や行事の記念撮影を行う「儀式的利用」が主か，それとも美的に優れた芸術作品としての写真撮影を目指す「自律した利用」であるかといった写真実践の機能に影響する．さらに，社会的には未だ正統な芸術とは見なされていなかった写真という趣味に対して，情熱的に没頭するか，それとも軽蔑的拒否をするかといった「狂信的な実践に対する態度」として写真実践を左右する．換言すれば，「収入」は，直接的に写真実践に影響を与えているのではなく，「集団の規範」すなわち社会階級のエートスを媒介として，間接的に影響するに留ま

る．このような理論化の過程を考察することで，社会階級において，経済的要因と（美的活動への意欲を含む）文化的要因とが及ぼす相対的に独立した影響を共に内包する理論モデルを，調査結果を踏まえて実証的に構築しようとした，ブルデュー社会学の特徴的な研究実践が明らかにされたといえよう[9]．

5. 統計的視点の導入による「ハビトゥス」概念の構築（「全的人間学」の認識論）

ありふれた身近な営みである「写真実践（撮影や鑑賞）」を研究対象とすることで，ブルデューは改めて，学問的な認識論の重要性を確認することになる．写真に関する既存研究の少なさは，研究者が認識論的反省を行なわず，自生的認識に基づいて「正統な研究対象」を選別し，「無意味と思われるある種の対象を学問から遠ざける」[Bourdieu et al. 1965＝1990: 17＝1]という結果がもたらしたと指摘する．そこには，研究の価値は研究対象の正統性とは関係なく，どのように研究対象を認識・構成し，理論モデルを導出したかによって評価されるべきであるという主張が込められていよう．ありふれた「写真実践」の分析から，文化的実践の社会的諸条件に関する理論構築を目指したブルデューは，アカデミズムに蔓延する認識論的な二項対立の乗り越えを模索し始める．前述の引用文に続けて，「客観性の口実のもとに，学問を行う人々の経験や，学問の対象となる人々の経験を，学問から排除するという行為」も，同様に認識論的反省の欠如に由来すると説く［Ibid. 17＝1］．当時ブルデューは，客観主義的な構造主義の立場に賛同しつつ，構造主義が「主体の経験を客観的記述の中へ再び取り込もうとするあらゆる努力を非難すること」[Ibid. 17＝2］にその限界を感じ，新たに「全的人間学」を構想した．これは，二項対立のどちらへも加担しない調整的な研究姿勢であり，また研究実践そのものを絶えず問い直す作動原理である．不断の認識論的反省を研究の出発

点に据えることで，抽象的な誇大理論へ陥ることを回避しつつ，現実の対象間の複雑な諸関係や，諸関係がそこに根を張り，そこで明らかとなる「経験」を，全体として包括的に理解することを目標として設定しているのである．

ブルデューは，当時のアカデミズムが前提としていた二項対立の弊害である無反省で自生的な社会学の認識論と手を切るために，統計的規則性の確立と理論モデルの構築というプロセスを経ること，そして行為者の経験を再び客観的記述の中へ取り込むことが必要であると説く．「社会学はその在り方そのものからして，主観主義者と客観主義者が勝手に作り出す架空の対立の止揚を前提とする」［Ibid. 18＝2–3］，そのような研究実践を目指さなければならないと，ブルデューは主張する．例えば「社会学が客観の（そして主観の）客観的学問，すなわち実験的学問となりうるのは，主体がその行為のあらゆる意味を，意識の直接的所与とは見なさないからであり，またその行為が常にそれら主体の知る以上の，そしてまた，望む以上の意味を内包しているからである」[10]［Ibid. 18＝3］という一文には，ブルデューが『社会学者のメチエ』（1968 年）で展開した，科学認識論（エピステモロジー）の社会学への適用という姿勢の萌芽を読み解くことができる．同書でブルデューは，「社会学者にとって最大の認識論的障害が社会的世界の身近さにあるという事実」［Bourdieu et al. 1968＝1994: 27＝44］を自覚し，自生的な行為者視点からの分離を確立する必要性を説いている．その際，「非意識の原理」と「関係性優位の原理」による「認識論的切断」を導入し，「関係的思考様式」によって関係間の関係である構造的相同性を把握する．そして「適用合理主義」の地平に立脚し，二項対立を超克することこそが重要であり，研究実践そのものも，体系的で循環的である必要を説く．すなわち，主観主義と客観主義とを包括的に捉え，また調査と理論構築が融合し，量的調査と質的調査が相補的に参照される視座である．ブルデューが『写真論』で提唱した「全的人間学」の視

座は，このような『社会学者のメチエ』における認識論的前提を踏まえた，新たな社会学的研究実践を指しているといえる．

そこでブルデューは，これら経験的調査を通じて把握した客観的規則性と行為者による主観的な経験とを媒介し橋渡しする意図を持って，独自の「ハビトゥス」概念を導入したと見ることができる．それは，「社会学は，疎外や態度あるいはエートスのような，主観と客観の間で両者を媒介し，仲介する諸概念を援用する．（…）諸関係の体系を構築することこそ正に社会学の仕事である」という記述からも明らかといえる［Bourdieu et al. 1965＝1990: 20＝4］．本論文ではさらに，「ハビトゥス」概念の構想によってブルデューは，量的調査が明らかにした客観的規則性と，質的調査によって把握される行為者の主観的経験との間の「媒介項」として，量的調査で用いた統計学的視点すなわち「統計的確率」のもつ両義性を自らの社会学理論に導入したことを挙げたい．言い換えれば，「ハビトゥス」概念は，ブルデュー自身の研究実践の経験（統計学的視点の習得）を反映 (reflect) して構築された，正に反省的な (réflexive) 研究実践の賜物なのである．

統計学的視点を社会学理論の構築に導入することで，どのような「ハビトゥス」概念の理解が可能となるのか．まずは，しばしブルデューを離れて，一般的な統計学の例から説明する．例えば，統計データに表れる「客観的な規則性」として，特定の属性をもつ人々がガンを発症する確率が3%だと判明したと仮定しよう．客観的には，100 人のうち 3 人がガンを発症しうるということである．しかし，あくまでも確率の問題である以上，1,000 人集めてみても偶然に誰もガンを発症しないこともあれば，逆にたまたま集めた 10 人のうち半数がガンを発症することもある．これを行為者の主観的な経験の側から考えてみれば，自分がガンを発症するかどうかは，発症すれば 100%，発症しなければ 0%の確率として経験される．決してある個人が「3%だけガンになる」という事態は生じない．言

い換えれば，特定の属性をもつ人々にとって3%という発症率は，客観的には「ごく稀なこと」として統計的に把握されるが，発症した当人からすれば，現実にわが身に降りかかった出来事であり，それゆえ主観的には「誰にでも起こりうること」として経験されるのである．

再びブルデュー自身の記述に戻る．主客統合という課題に直面した際にブルデューは，「ここで問題なのは（…）理論に基づく方法論的要求である，ということを納得させるには，一例を挙げるだけで十分であろう．統計によれば，ある一定の社会カテゴリーに所属するよう客観的に縛られる確率の体系が客観的に確立されている」ことに注目する．直後に例示されるように，「資格や教育のないアルジェリア出身のプロレタリアート以下の人々が永久雇用を手にする可能性であったり，労働者の子女が法学部や医学部に入る可能性であったりするとしても事態は同じ」[Ibid. 20＝5]であり，客観的には「ごく稀なこと」であっても，懸命な努力と幸運によって偶然にも実現した当事者からすれば，主観的には「誰にでも起こりうること」として経験されがちである．それゆえ彼ら/彼女らは，所属する社会集団や階級が社会的に排除されている構造（客観的規則性）に思い至らないか，もしくは過小に評価する．「かくしてプロレタリアート以下の人々も，途方もない驚くべき夢をもつことができるのであり，この夢は彼らの条件の客観的真理とは表面的にしか矛盾しない．というのもそうした夢は客観的未来をもたない人々に特有の未来志向を特徴づけているからである．同様に労働者や農夫の子女に関して言えば，統計によれば，その高等教育達成は文学部への追放という形で報われるしかなかったのだが，彼女はその学業を完全に肯定的な『天職』として全うすることもできるわけである」[11] [Ibid. 21＝5]．こうしてブルデューは，統計学的な視点を導入することによって客観的には「ごく稀であること」と主観的には「誰にでも起こりうること」いう矛盾した事態が，理論モデル上に矛盾なく共存しうることに注目したと考えられる．そして，この主観と客観を媒介し，

橋渡しする概念としてブルデュー社会学に導入されたのが，他でもない「ハビトゥス」なのである．長文となるが，彼自身の同書での定義を以下に引用する．

> 「性向の体系ともいうべき客観的諸条件の内在化の結果を媒介とすることでのみ，また，その結果においてのみ，客観的に諸関係は実在すると共に現に実在化されるということを想い起こさせることは，主観主義あるいは『人格主義』の素朴さに再び陥ることではない．客観的規則性の体系と直接観察可能な行為の体系との間には，ハビトゥス以外の何ものでもない一種の媒介項が常に介在している．ハビトゥスとは（※社会）決定論と（※個人の）決定作用との，また計算可能な蓋然性と体験された希望との，そして客観的未来と主観的企てとの幾何学的場である．したがって肉体的あるいは精神的性向の体系，思考や知覚や行為の無意識な図式の体系として理解された階級のハビトゥスは，予見し難い新しいものの創造と自由な即興によって，まさに根拠づけられた幻想として，行為者が，客観的規則性に合致したあらゆる思考，知覚，行為を生起させることができる因となるものである．」［Ibid. 22＝7］

加えて，全的人間学が目指したのは，単に主客を統合することではなく，両者が媒介される時間的・歴史的な過程の分析，すなわち「客観性が主観的経験の中に，その経験を媒介として根を下ろしていく過程の分析」［Ibid. 21＝6］である．これら「客観性の内在化の過程」は，日常の些細な知覚や経済的・社会的世界の容認が，幼児期から全生涯にわたって絶えず想起することで，客観的諸条件への実践的準拠として規定される「無意識」を，いかに構成するかを明らかにすることで分析される［Ibid. 22＝6］．ハビトゥス概念が，構想の当初から時間的な生成の契機をも内包し

ていたことは，注目に値する．ブルデューの全的人間学において，ハビトゥス概念は正にその中心的な位置を占めているのである．

6. 科学的厳密性のための仮説検証と認識論（フランスとヨーロッパの美術館調査）

ここで再び，ブルデューの量的調査経験の概要に戻りたい．1961～1964 年に実施された『写真論』の調査と連続して，1964 年には，文化省の研究調査局の要請を受けて，フランスの美術館訪問に関する調査が企画された．ブルデューは，アルジェリアで共同研究を行った統計学者のアラン・ダルベルと共に（また『写真論』の調査にも参加したドミニク・シュナッペーの協力を得て），美術館とその訪問者に対する全国的で大規模なアンケート調査を実施した．ブルデューが関与した調査に限定してまとめると，1964 年度には，美術館の来訪者について，予備調査（250 名）と，その分析結果を踏まえた本調査（21 の美術館における 9,226 名）が実施された．7 月には 5 つの美術館で補足調査（625 名）を実施し，またパリ装飾美術館が独自に実施したアンケート調査（4,000 名）の整理分析も行った［Bourdieu et Darbel 1966＝1994: 169–70＝197–8］．さらに，1964～1965 年度にかけて，12 月に開催されたリール美術館の 3 つの展覧会の来訪者調査を指導し（500 名），3 月には同リール美術館で来訪時間と絵画の知識に関する実験的測定を指導した（121 名）．得られたデータは，ブレーズ・パスカル研究所と人間科学館計算センターのスタッフの協力を得て，因子分析のコンピュータ解析にかけられた．

ブルデューは美術館訪問に関する調査において，アルジェリアにおける資本主義のエートスの浸透や，フランスで広く普及した写真実践など，文化的伝播の過程に関するこれまでの研究蓄積によって得られた諸仮説の総体を用いて，フランス国内およびヨーロッパ諸国の美術館訪問者の社会的・学歴上の特徴，美術館に対する態度や意見，芸術的な好みについての

体系的なアンケート調査を実施した．これら調査結果の詳細な検討と分析により，人々に美術館訪問を促す諸要因を包括的に把握して，諸要因の関係およびそれら諸関係間の構造を抽出した．続けて，実証された美術館訪問の要因を，美術館来訪者の（美術館訪問を含む）文化作品に対する性向の生成や構造と関連づけて解明すべく，一貫した体系をなす論理的命題をダルベルが数理モデルとして構築し，諸仮説に基づいて実施された量的調査による統計データの一貫した体系とつき合わせる科学的な「検証の歩み」となった．こうして得られた研究成果をまとめたものが『美術愛好』（1966 年）であり，それゆえ単なる理論的成果の提示にとどまらず，そこに至るまでの問題設定の時代的背景や，研究実践へ向けた反省的制御，データに基づく数理モデルの提唱と，体系的理論を検証する数理統計学，標本抽出法の検討など，研究の足取りをも掲載している．

この時期のブルデューは，『写真論』で展開した研究実践へ向けた認識論的反省に加えて，新たに社会学の学問としての客観性を，科学的な厳密性に求めることに大きな関心を持っていたと想定される．データに基づく仮説の検証と，体系的な仮説に基づくデータ収集という循環的な研究過程から，自然科学の理論は構築される．このような自然科学の厳密性を，美術館訪問の調査を通じて自らの研究実践に導入しようと試み，その研究軌跡を記録したのが『美術愛好』（1965 年）であると位置づけられよう．なお，ブルデュー自身の研究実践における理論研究と経験的研究の不断の往復活動は，『社会学者のメチエ』（1968 年）において，第 3 部第 2 章「命題の体系と体系的検証」に結実している．同書は，『芸術愛好』出版前後の 1966 年頃から書き始められ，社会学の認識論的前提条件を論じたものである．

7. 統計・確率的な視点の影響（『美術愛好』の研究実践）

以下では，『美術愛好』における研究実践の特徴を描出する．しかし，

ブルデューらが調査過程で具体的にどのような検討を行ったのか，質問票の作成，標本抽出法の検討，コード化と結果の分析，定式化の試み，国際比較の注意点などについては，著書文頭の「研究の歩み」で自ら明示的に詳細を記している．そこで，一歩進めて，著書の本文において言及されている統計・確率的な視点が，ブルデューの研究実践をどのように特徴づけているのかについて考察したい．

『写真論』で確認したように，ブルデューの社会学理論の命題は，哲学的で抽象的な論考のみによって構築されたというよりも，むしろ経験的データの統計分析によって裏づけられたものといえる．『美術愛好』では，それが個々の命題の「内容」についてだけではなく，命題の「形成過程」においても該当する．以下に顕著な 3 つの例を提示したい．

一つ目は，データ上の相関関係が，擬似的なものである可能性の検証である．「年齢と美術館訪問を結びつけている関係は，単に教育の効果をいいかえたものにすぎないのではないか」［Bourdieu et Darbel 1966＝1994: 37＝37］と自問したブルデューらは，教育水準に注目したところ，性別や職業（社会階級）などのカテゴリーの差異が顕著でないことを，統計データから得られた数値を計算して，カテゴリーごとの年間訪問率（数学的期待値）を求めて比較することで，明らかにした．続いて「美術館訪問者のうちで，大学入学資格以上の学歴を持つ者とそれより低い教育レベルの者という二つの下位集団に因子分析 (l'analyse factorielle) を提供したが（これによって教育レベルの影響が中性化できよう），問題となるいくつかの変数（社会的および文化的特徴あるいは美術館に対する態度や意見）の間に有意な相関が見られなかったこと，他方で，被調査者全体について，これらの変数すべてを教育レベルに結びつける強い関係が見られるという事実である」［Ibid. 51＝50］という分析過程を経る．この検証結果が，巻末付録 2 の表 23 と表 24［Ibid. 198–9＝216］の相関行列にまとめられている．教育水準の違いによって 2 つの表を描出したところ，

算出された相関係数の大多数の値が「R＜0.100」でほとんど相関がないことが判明し（最大値で，大学入学資格以上の人々における，美術館の活動に対する意見と，何を見に来たかの相関係数R＝0.372），ここから教育効果の擬似相関であったことを立証している．

二つ目は，仮説検証の過程である．一般的に統計分析では，帰無仮説を立てて，それを棄却することで，本来の仮説を立証する．同様な研究過程を，次のような文章に確認することができる．「美術館訪問を実践する人々の割合とならんで，その実践の強さ（一定期間内での訪問回数によって計られる）が，教育レベルの上昇とともに増加するかどうかを示すには，各カテゴリーの中で，より大きな部分を占める者がより頻繁に訪問することを証明するか，学歴に従って切り取ったいくつかの相異なるカテゴリーが，実践の強さという点で同質であることを示す必要がある．」（数式の展開は省略）「これを証明するために，訪問者の異質性を仮定」すると，「理論的結果と実際の調査結果との食い違いから，観衆の異質性の仮説を否定することが可能となる」［Ibid. 43–6＝42–5］という手続きである．

最後に三つ目として，「近似」という考え方の導入が挙げられる．「美術館を頻繁に訪れる観衆の構成は，その美術館が提供する情報レベルの近似的な指標と考えることができる」［Ibid. 113＝113］という文中の表現は，単に両者の類似を直観的に指摘しているのではなく，無作為抽出であれば近似的に正規分布に従うと見なす数理統計学的な処理と同様，論理的に置き換え可能な数値と見なしていることを意味する．

また，命題形成とは異なるが，統計的手法の影響として，図5「各美術館の供給の最頻レベルと分散」［Ibid. 126＝128］が大変興味深い．この図は，縦軸に「分散δ」を，横軸に「ωの最頻値」を設定し，17つの美術館を配置して，「提供される情報と受け手の能力の程度が等しいという原則に従うなら，最頻訪問者を尺度として測定した美術館の供給レベルの間に見られる違いは，それぞれが展示している諸作品のタイプと質におけ

る相違に対応している」[Ibid. 129＝132] と分析する．言い換えれば，「(展示作品の近似である) 観衆の分散 δ」と「供給される展示作品のレベルを表すパラメータ ω」によって，美術館を複数のカテゴリーに区分している．ここでブルデューは，序列化の難しい美術館を，研究者の恣意によってではなく，統計データの同質性によって分類しようと試みている．このような，統計的手法を駆使して対象の分類区分（範囲画定）そのものを「データに語らせる」というブルデューの発想は，ブルデュー社会学の重要な特徴であると考えられる．そのことは，1970年代初頭にベンゼクリによって開発されたコレスポンデンス分析を，ブルデューが直ちに統計的手法として取り入れ，『ディスタンクシオン』(1979年) における社会的空間と場（界）の概念へと展開したことにも見出すことができよう．

8. 統計的手法と社会学理論
(「文化資本」と「象徴的暴力」の概念構築)

最後に，『美術愛好』に見られるブルデューの統計的手法の導入が，ブルデュー社会学理論の形成に与えた影響を考察する．一つは，性向の体系であるハビトゥスとしての「文化資本」概念の精緻化であり，もう一つは，二項対立の超克による「象徴的暴力」論の展開である．

ブルデューは，美術館訪問に関する統計分析を通じて，「文化に関しては有利さも不利さも蓄積される」[Bourdieu et Darbel 1966, 49＝47] ことに注目する．「教育レベルという指標をとおして捉えられるのは，家庭の中で獲得される文化的形成の諸効果と，こうした形成を前提とした教育による修得との蓄積以外の何物でもない」[Ibid. 52＝51]．加えて「一つの文化領域におけるあるタイプの実践が，かなり高い確率で，他の諸領域における，それと等価なタイプの実践に結びつくということができる．たとえば美術館へ頻繁に通うことがほぼ必然的に，同程度に劇場へ通うことに結びつき，まだ，それ程ではないが，コンサートに通うことに結びつ

いている」[Ibid. 101＝101] ことを分析する．「かなり高い確率」とは，実際にブルデューが行ったアンケート調査の項目のなかで劇場やコンサートに訪れる頻度を質問しており，上記引用文に続けて美術館訪問との相関係数を算出して比較していることから，文字通り統計的確率を意味することに注意する必要がある．さらに「学校教育による修得が転移していく性質をもつ」[Ibid. 102＝103] ことを示す証拠として，相関係数を算出して比較している．以上の一連の研究実践からブルデューは，「文化資本」が蓄積・転用されるという着眼を，統計分析に基づく実証的で循環的な概念構築の過程で獲得したといえる．それはまた，「教育的コミュニケーションの価値，強さ，様式はそれ自体，教育を受けるものがその家庭環境に負っている教養の関数である．教養は内容の面でもまた知的文化作品に対する態度の点でも，またこの態度が含む教養習得の点でも，学校が伝達する知的教養に近い．つまり学校がこの伝達を行う際に従う言語や文化のモデルに近いといえよう．知的文化作品を直接に体験することと，そうした作品を正しく体験するための条件である教養を制度的に組織化された形で習得することとが，同じ諸法則に従っているのだから，文化資本が文化資本を生むという循環を断ち切ることが，いかに困難であるかを理解することができる．（…それゆえ）現状のような文化資本の伝達を正当化する」[Ibid. 109＝110] という第二部の結びの文章にも表れている．このことから，ブルデューが著書で用いる「関数」という表現は，単なる類似を指し示すものではなく，統計的・数式的な意味での関数を指しており，実証に裏付けられた理論形成がなされていることが確認できる．

もう一つの特徴は，統計データの提示による主客対立の認識論的超克と，その生成過程の分析に基づく「象徴的暴力」論の構想である．ブルデューは，既存研究が人々の社会集団の同質性を前提としたために，文化的性向が資本を産出・蓄積するメカニズムを捉え損ねていると指摘する．そして「これら（※二項対立）の魔術化に対し，数字による脱魔術化のリ

アリズムを対置」［Ibid. 132＝135］させるという研究姿勢を打ち立てる．例えば，絵画を読解するのに必要なコードの習得に教育レベルごとの格差があるという調査結果を得ると，この統計データを提示することで，当時，芸術について流布していた二つの立場，つまり「美的センスは天賦のものである」といった宿命論的な言説も，また「本物の芸術に触れれば，誰もが美的センスを開花させる」と芸術的救済を主張する言説も，その対立は見かけ上のものに過ぎないと退けた．いわば，二項対立に陥りがちな自生的認識を研究の「前提」として容認してしまうのではなく，これら認識論上の二項対立の社会的な構築過程と効果とを共に研究対象に据えて，「分析」を行っているのである．こうして，宿命か救済かという二者択一の論争から距離を置くことで，これまで不問にされてきた，芸術を理解する力（審美眼）を産出する社会的諸条件（教育レベルおよび階級による格差）について，また統計分析の結果によって示される現実の状況（格差を産出する社会的諸条件）を覆い隠すイデオロギーとして作用する「これら（※二項対立）の魔術化」効果について，ブルデューは新たに問題提起することが可能となった．つまり，一方で，芸術理解をめぐって相対立する論争から距離を置くために（二項対立を乗り越えるために），統計データによって美術館の訪問者の教育レベルを把握することで，認識論的な切断を行う．また他方で，こうして量的データを対峙させることによって，当時流布していた言説が，統計によって把握される現実の格差を隠蔽する「恣意性の押しつけ」［Ibid. 162＝166］として，教育のなかで機能するという象徴的暴力の分析を視野に入れた問題設定が可能となったのである．ここにはまた，格差を産出する社会的諸条件の誤認による承認が，現行の社会秩序の維持（再生産）のための条件でもありまた所産でもある，というブルデューの特徴的なレトリックを見出すことができる．こうした現実の統計データに立脚するという認識論的な態度，換言すれば，研究者の自生的な思い込みを断ち切るために実際の調査結果を尊重するという研究姿

勢は，文化的領域だけを研究対象とするのではなく，教育・文化・階級を横断する人々の慣習行動（実践：プラティック）の産出条件の包括的な把握へと至る，ブルデュー社会学の理論形成の基点といえる．

9. 結語：ブルデュー文化社会学における量的調査の影響

既存のブルデュー研究のなかでは十分に検討されてこなかったが，量的調査の経験が，ブルデュー社会学に与えた影響は大きい．ひとつには，自らの研究実践に対する認識論的反省を行うために，研究実践を「制御する手法」として統計データ（量的調査の分析結果）を位置づけていたことが挙げられる．例えば『写真論』では，当時の写真に関する研究の多くは「収入」が「写真の実践（撮影や鑑賞）」に対して直接の要因として影響すると見ていたが，こうした自生的な認識に対して詳細で厳密な統計分析の結果を対置することで，階級のエートス（ハビトゥス）を媒介とした間接的な影響しか及ぼさないことを検証した．また，『美術愛好』においても，人々の美術館訪問は年齢や美術館の展示内容には影響されず，職業カテゴリーと教育の「関数」によって説明できることを，因子分析を用いることで明らかにした．同時にまた，ブルデューは「これら（※二項対立）の魔術化に対し，数字による脱魔術化のリアリズムを対置」させることで，当時の芸術教育に関する二項対立（宿命か救済かという論争）から距離を置き，統計分析の結果を用いて文化的実践の教育格差・階級格差を描出することに成功した．このように，統計的手法を導入することによって，研究者の思い込みや常識に左右されない客観的な研究実践をブルデューは目指していたといえる．

もうひとつは，ブルデューの概念構築や理論形成に，統計的手法そのものが与えた影響である．再び『美術愛好』からの引用を取り上げると，「これら（※二項対立）の魔術化に対し，数字による脱魔術化のリアリズムを対置」させることは，他方で，二極化した教育言説の流布や，教育の

もつ象徴的暴力としての恣意的押しつけの作用へとブルデューの注目を促し，社会学の研究対象を新たに構成し直す契機を与えたといえる．すなわち，量的調査の分析結果を対置することで，当時の芸術教育に関する二項対立の恣意性に自覚的になることができ，それゆえ恣意的で二極化した教育言説が社会的に構築されてきた過程の分析へと，研究を進めていくことを可能にしたのである．また，『写真論』においては，写真（という文化的）実践がありふれて身近であるがゆえに量的調査を行いやすく，その分析結果から，文化生産（撮影者）も，文化消費（鑑賞者）も，構造的相同性をもった関係をそれぞれ形成しており，それら関係間の関係のなかでのみ文化的実践の解釈が可能である［Bourdieu et al. 1965＝1990: 24–6＝9–11］，とブルデューに気づかせる格好の題材となったことは想像に難くない．こうして，統計的手法を取り入れたブルデュー文化社会学は，文化資本やハビトゥスを介した象徴的暴力論へと展開され（『再生産』1970 年），文化生産（提供された作品群）と文化消費（美術館訪問者の鑑賞能力）それぞれの序列化された「場」が構造的相同性を持つことに注目した象徴的権力と場（界）の理論へ（『ディスタンクシオン』1979 年），また，文化的実践のみならず，広く人々の日常実践（慣習行動，プラティック）の理論へ（『実践感覚』1980 年）と，後に結実していく．正にブルデューの学問形成の中核には，量的調査の経験が深く根づいているといえる．

以上，概観してきたように，本論文はブルデューの研究実践および学問形成における「量的調査」の影響へ着目することで，ブルデュー社会学の学説研究に新しい視点を提起するものである．

最後に，学説形成史の研究にとって，量的調査の導入といった研究実践の過程に注目することの意義を改めて確認しておきたい．本論文で考察した例を挙げれば，既存のブルデュー研究における「ハビトゥス」概念の理解は，いわば「静的」とも表現できるものであり，その多くが理論研究に

おける概念的な次元から，もしくは実証研究のための操作的な次元から論じられてきた．しかし，本論文中で新たに提起したのは，ブルデューの研究過程と照合することによって，生成的な次元から考察する「動的」な理解である．このことは，「ハビトゥス」概念の構築が，ブルデュー自身の研究実践を通じて，量的調査（測定によって明らかとなった客観的規則性）と質的調査（観察やインタビューによって把握される行為者の主観的経験）との間に「媒介項」を設定する必要を感じた際に，量的調査で用いた統計的な視点によって，すなわち「統計的確率」そのもののもつ両義性を理論に導入することで誕生した，という軌跡が示すところである．学問形成の過程に注目することにより，生成的な次元から「動的」に理解するという研究視点を設定することは，異なる時代や社会のなかで格闘しながら人間や社会について研究を行い，また理論形成や概念構築を行ってきた，先人たちの「手法」を学ぶことを通じて，現代日本に生きる私たちが人間や社会について研究する際の大きなヒントを与えてくれよう．学史研究は，遡ることで見えてくる「生きられた過去」を，「生きている現在」に継承するための探究の営為である．

注

1. 続けて，ブルデューの社会学理論を「宿命論」と誤解する者の多くは，「統計についての無知，あるいはさらに統計的な考え方に対する不馴れから，蓋然性（例えば社会的出自と学校での成功との間の関係のような）と確実性や必然性とを取り違えてしまう」ゆえであると指摘している［Bourdieu 1980 b＝1990: 40＝51］．「読者が社会学を読むときには，自分たちのハビトゥスの眼鏡で読む」［Ibid. 41＝52］ことに，私たちは改めて自覚的であらねばなるまい．
2. ブルデューが哲学から人類学（民族学）へと重心を移行していく過程の考察は，［三浦 1997］［Schultheis 2005］などに詳しい．
3. 詳細は，［Harker et al.(eds.) 1990］［三浦 1998］等を参照されたい．
4. レイモン・アロン（1905〜1983）は，産業社会における家族や地域，マス

メディアによる社会・文化的諸局面の変化について，量的調査に基づく分析を行った．諸事象間で因果関係がみられる場合に，それを一元的に捉えるのではなく，むしろ事象を変数として捉え，まずある変数を出発点として，どこまで他の現象が測定できるのかといった方法をとる，諸変数＝諸要素間の相互連関に重点をおいた機能分析的方法を採用し，マルクス主義的な分析方法を批判した［岩城完之 2001］．こうしたアロンの方法論は，初期文化研究を開始したブルデューに多大な影響を与えたと考えられる．なお『写真論』の冒頭には，「レイモン・アロンに」という献呈の一文がある．

5. 6 つの二次資料とは，1958 年の市場調査協会による写真市場の統計的研究，1961 年の経済・応用数学協会による小型写真の市場に関する社会・心理学的研究と，同協会による小型写真の潜在的市場の社会・心理学的研究，1962 年の経済・応用数学協会によるフランスにおける大型写真機の市場研究，1963 年のコダック・パテ社によるフランスにおける 8 ミリ映画の市場研究，最後に 1964 年のフランス世論調査協会による青年層の調査統計である［Bourdieu et al. 1965＝1990: 337–8＝336–7］．
6. 挿入図は，邦訳から引用した［Bourdieu et al. 1965＝1990: 351＝349］．なお，仏語原典では図の下に「この図では適切な関連しか取り上げておらず，収入と裕福さ，子供の数と年齢などの副次的関係は除外している」という但し書きが添えられている（邦訳では省略）．
7. ここでは，単なる思いつきを命題化したのではなく，調査結果の統計分析を踏まえていることに注目されたい．ブルデューは収入を低中高の 3 つに分類した上で，高収入層の実践機会の上昇が中収入層と比較して小さいこと，また写真撮影をしない高収入層の拒否理由の多くがなお「金銭的に高くつくため」を挙げていること等から，収入による機会減少を描出している．
8. こうした問いの立て方は，一見すると個別の事情と感情的な要因によるものと解釈されがちな自殺が，所属する社会集団の統合の強さに影響を受けていること（過度の個人化による「自己本位的自殺」）を統計データに基づいて分析したデュルケムの『自殺論』［Durkheim 1960＝1985］の手法に影響を受けていると思われる．
9. 「経済資本」と「文化資本」という 2 つの側面から社会階級を捉えるという視点も，このように量的調査に基づく理論化の過程からブルデューが着想を得たことは想像に難くない．『ディスタンクシオン』でブルデューは，社会的位置空間を描出する手法としてコレスポンデンス分析を用いているが，それにより社会階級を規定する多種多様な変数を二次元の平面図上に配置し，変数間の遠近によって（データに内在する性質によって自ら）社会階級の境

界づけ（範囲画定）をすることに成功している．それぞれの軸の両極を「二項対立」として解釈することはできるものの，軸の意味づけ（解釈）の仕方は分析者に委ねられている．周知のとおりブルデューは，X 軸を「資本の分配構造」(マイナスの方向を「文化資本＋，経済資本－」，またプラスの方向を「文化資本－，経済資本＋」）として，Y 軸を「資本の総量」として解釈しているが，そのこと自体は統計的必然性によるものではなく，あくまでもブルデューが自身の研究蓄積によって「経済資本」「文化資本」という概念を用いて意味づけることの有効性を確信していたからであろう．

10. なお，上記引用箇所でブルデューは「主体 (sujet)」という表記を用いている．これは，構造主義的な認識に立脚していることを意味しており，『写真論』が執筆された 1965 年の段階では，まだ「視点の転換」(『実践感覚』) がなされていなかったこと，すなわち客観性の担保に重きをおいていたことの例証となる．しかし他方で，量的調査により統計データ上に現れた客観的な「規則性 (régularité)」と，そこから理論モデルを構想し，人々の実践（慣習行動）に見られる集団的な共通点として抽出したパターンの「規則 (règle)」とを，用語法上，厳密に使い分けている．（なお邦訳では，一部両者の訳語が混在している箇所があるので，原典を確認されたい．）

　いずれにせよ，あくまでもこの時期（1960 年代後半）のブルデューは，客観主義的な視点に社会学の科学性を見出そうとしており，構造主義からの完全な脱却には更なる契機が必要であった．

11. なお，この「天職」という感覚による「主観性の共犯」[Bourdieu et al. 1965＝1990: 21–2＝6] すなわち自己排除のメカニズムは，後に『ディスタンクシオン』において「運命愛」として詳細に理論化される．

引 用 文 献

Bourdieu, Pierre 1979 ***La Distinction,*** Minuit.　石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I・II』藤原書店，1990.

Bourdieu, Pierre 1980a ***Le Sens Pratique***, Minuit.　今村仁司・港道隆ほか訳『実践感覚』1・2 みすず書房，1988・1990.

Bourdieu, Pierre 1980b ***Questions de Sociologie***, Minuit.　田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店，1990.

Bourdieu, Pierre 1987 ***Choses Dites***, Minuit.　石崎晴己訳『構造と実践』藤原書店，1991.

Bourdieu, Pierre 1988 ‘Meanshile, I have come to know all the diseases of so-

ciological understanding: An interview with Pierre Bourdieu, by Beate Krais'***The Craft of Sociology***, de Gruyter, 1991.　田原音和・水野和則訳「ブルデュー自身が語る『社会学者のメチエ』」『社会学者のメチエ』藤原書店，1991.

Bourdieu, Pierre and Loïc J. D. Wacquant 1992 ***An Invitation to Reflexive Sociology,*** The University of Chicago Press. = ***Réponses: pour une anthropologie réflexive***, Èditions de Seuil.　水野和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店，2007.

Bourdieu, Pierre et Alain Darbel 1966 ***L'amour de l'art,*** Minuit.　山下雅之訳『美術愛好』木鐸社，1994.

Bourdieu, Pierre et al. 1963 ***Travail et Travailleurs en Algérie***, Mouton.

Bourdieu, Pierre et al. 1965 ***Un Art Moyen***, Minuit.　山縣熙・山縣直子訳『写真論』法政大学出版局，1990.

Bourdieu, Pierre et al. 1968 ***Le Métier de Sociologue***, deuxième édition (1973), Mouton.　田原音和・水島和則訳『社会学者のメチエ』藤原書店，1994.

Durkheim, Émile 1960『自殺論』宮島喬訳，中央公論新社，1985.

Harker, Richard Cheleen Mahar & Chris Wilkes(eds.) 1990 ***An Introduction to the Work of Pierre Bourdieu: the practice of theory,*** Macmillan Press. 滝本往人・柳和樹訳『ブルデュー入門：理論のプラチック』昭和堂，1993.

北條英勝 2003「社会調査における無回答から声なき人々の社会分析へ：世論調査の無回答に関するブルデューの分析の応用」宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力：反射するブルデュー』藤原書店.

本田成親 2003『確率の悪魔：科学理論と現実のはざま』工学図書.

岩城完之 2001『レイモン・アロン：危機の時代における透徹した警世の思想家』東信堂.

中井美樹 2006「複数のカテゴリー変数の類似性を検討する：双対尺度法と数量化III類（趣味と文化的慣習行動）」数理社会学会監修『社会の見方，測り方』勁草書房.

May, Tim 2001 ***Social Research***, Open University Press.　中野正大訳『社会調査の考え方：論点と方法』世界思想社，2005.

三浦直子 1997「P. Bourdieu の研究実践と認識論の基層的形成：1951–64 年における問題関心と学問形成の関連をめぐって」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』44.

三浦直子 1998「手法としての社会学理論：いかにしてプラティック理論は構築さ

れたか」『年報社会学論集』11, 関東社会学会.
三浦直子 2008「ブルデューの初期文化社会学における量的調査の影響」日本社会学会第 81 回大会一般研究報告.
P. ブルデュー社会学研究会 1999『象徴的支配の社会学：ブルデューの認識と実践』恒星社厚生閣.
Robbins, Derek 1991 ***The Work of Pierre Bourdieu*** Open University Press.
Schultheis, Franz 2005「フィールドと研究のポリティクス：アルジェリアのブルデュー，ブルデューのアルジェリア」櫻本陽一訳『東西南北』和光大学総合文化研究所，2005 年号.
高根正明 1979『創造の方法学』講談社現代新書.